

# 植物随想

## オオシラビソ

### 笹川通博

暑いから涼しいことを考えよう。

新潟は大変な雪国であると、学校でも教わったし、テレビでも見ていたので、余程覚悟していた。しかし、いざ新潟に来てみると、新潟市などではそうでもない。小学校の教科書に載っていた、家が雪で埋まっているあの印象的な写真は、どうもよくない。本当はきちんとした説明が付いていたのかもしれないが、単純な小学生の頭は、日本海側はどこもそうだと思います。それで新潟の人は、誰でもスキーが上手で、冬などはスキーをはいて登下校するのだろうと思っていた。これまたとんでもない思い込み。新潟市内の人などは、俺はスキーなどしたこともない、と平気で言うから驚いた。日本国内でもこれだけの思い違いがあるのだから、ましてや国の間では、どれだけの誤解があることか。

さて、そのスキーであるが、逆上がり一つ、キャッチボールさえも満足にできない身にしてみれば、恐怖である。学生時代、友人に誘われたこともあったが、みんな頑として断わった。出身高校にもスキー学校という行事があって、希望者が大勢、参加する。大分前そのスキー学校に、何を考えたか、一人のどうしようもなく不器用な男が参加したようだ。母親が随分と心配して、担当の先生にウイスキー持参で挨拶まで行った。さて、なんとか初めてスキーをはき、準備体操をする段になった。スキーをはいたまま足を回転させると、ついでに骨まで折れてしまった。ウイスキーをもらったその先生は、それ以来、二度とスキー学校には行かないのだそうだ。その男の二の舞になるに相違ない、桑原桑原、と思っていた。

ところが、学生を終えて学校に勤めると、恐ろしいことに、スキー授業なるものがある。体育の先生でなくても、生徒達にスキーを教えなくてははいけない。それでしかたなく、スキーをすることになった。スキーについて、前から疑問に思っていたことがある。それは何故、リフトなんかに乗る、わざわざ山の上まで行くのか、ということだ。スキーを実際にしてみても、やっと分かった。要するにスキーというのは、山

の上から下へ滑るものであって、決してその逆ではない。重さのあるものが、上から下へ移動するのは、全く自然のことである。最初はもちろん、思うようにならなくて苦労した。しかし、ある程度できるようになると、今度はおもしろくてたまらない。人から見ればどうしようもなく下手糞に滑っているであろうが、自分で楽しんで、あまり人様の迷惑にならない程度であれば、まあ、よいではないか。

それでここ毎年、春休みになると、山形県の天元台というスキー場に行く。麓にある白布温泉の古い宿屋に泊り、普段ではできないぜいたくな時間を過ごす。スキー場にはロープウェイで上り、標高も随分と高いらしい。何しろ、オオシラビソやコマツガの林の中を滑るのだから、素晴らしい。新潟あたりのスキー場で、スギの植林地の中を滑るのとはわけがちがう。木の上の方に、角のような実の軸を残して、幹は白っぽいのがオオシラビソ。枝の先端に、小さな実を垂れ下げ、幹はどちらかという松の木のようなのがコマツガ。そんな勉強もできる。滑って来て、雪の中で立ち止まり、オオシラビソの白い幹をなでる。何かほの暖かいものを感じる。何とも、幸福な気持ちだ。雪の中で黒々と葉を茂らせ、この木は、生きているのだ。

新潟県にオオシラビソが少ないのは、標高のせいばかりではない。地形も関係している。オオシラビソ林が成立するには、平坦な土地が必要なのだ。新潟県の山地は急峻な斜面が多く、オオシラビソには適さない。そんな新潟県でも、苗場山にはオオシラビソの林がある。特に見事なのは、小松原湿原のものだ。キンコウカは黄色い花をつけ、ワタスゲは白い綿毛を飛ばし、モウセンゴケの葉は淡い赤で湿原を染める。オオシラビソの甘ったるい香が、湿原全体に満ちている。どこか懐かしい、森の香。夢のような情景。しかし、夢ではない。傾斜のきつい所は、ブナ林である。湿原全体が、昔と比べて乾いて来ているという。ここには、湿地の植物、ブナ、そして、オオシラビソなど、多くの生物の、静かではあるが、厳しいせめぎあいがあるのだ。足元の芽ばえたばかりのオオシラビソも、本当に、いつかその親のように、太く、高く、天にそびえ立つことができるのであろうか。

そして、人間。夏の頃、上越線沿線を行くと、目をおおいたくなる情景が続く。無残にも衣をはぎ取られた山々。これが冬、僕たちがさんざん楽しんだ、代償なのだ。

